

# 鳩ちゃん

高島巖

絢子さんご昭子さんご毬子ちゃんは、三人姉妹でした。

絢子さんは、今年十一で尋常四年生、昭子さんは八つでこの四月から尋常一年生、毬子さんは六つで、やはりこの四月から幼稚園へ行くことになつてゐます。

\*

ある天氣のいい日曜日の晩のこゝです。

家中うちでお夕飯をいただいでゐる時、お父さまがおつしやいました。

「毬子、昭子、絢子。いいお家うちが見つかったよ」

「えッ、何處どこに？ 學校、近い？」

「ああ、學校の直ぐ裏だよ」

「あらさう、ぢや、昭子さんに丁度いいわね」

「うむ、それから、毬子にもいいこゝがあるよ」

「あら、なあに？」

「毬子。毬子鳩ちゃん、好きだらう？」

「ええ、毬子鳩ちゃん大好き」

「その鳩ちゃんがたくさんゐるんだよ」

「まあ」

「大きな森があつてね、その森の真中にお宮があるんだ」

「あら、そのお宮みやにゐるのね、鳩ちゃんが」

「さうだ。さてもたくさんゐるんだよ」

「まあ、いいわね。お父さま、早く越してよ、何時越すの？」

「？」

「二月十一日」

「あら、紀元節？ その日學校で式があるわ」

「絢子は、學校から真直ぐ、新しいお家へ歸ればいいだらう」

う

「でも、お道がわからないわ」

「大丈夫。お父さまが、ちやあんご地圖を畫いてあげるから」

ら

「昭子と毬子ちゃんはお父さまが連れて行つて下さるでせう？」

せう？」

「うむ、昭子はお父さま、毬子はお母さまと行くことにしやう」

やう

\*

こんな風で、毬子ちゃんたちは、森の側の新しいお家へ越して來ました。

初めの日はごたごたしてゐて、お宮までには行けませんでしたが、明日の朝、目がさめたら直ぐにお宮へ行くお約束をして、おやすみしました。

\*

「お母さま、お母さま、お母さま」

「なにさ、朝から大きな聲を出して。びつくりするぞやありませんか」

「ううん、あのね、持つて行くの」

「なにを、何處へ持つて行くの？」

「お宮へ。そして食べさせるの」

「ああ、鳩ちゃんに？お豆ね」

\*

毬子ちゃんたちが、お宮へついた時には、もうお陽さまが森のあたを離れて、お宮の地面一杯に當つてゐました。

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「あら、ゐたわ、ゐたわ、ゐたわ、随分たくさんゐるのね、お姉さま」

お姉さま

「さうね。あら、向ふからも來るわ」

「昭子お姉さま、早く、お豆をあげませうよ」

「ええ、毬子ちゃん、これあげてごらんなさう」

毬子ちゃんが、お豆を一ミつかみ放つてやりますと、向ふからもこつちからも、たくさん鳩ちゃんがやつて來て、目を白黒させながら食べ始めました。

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ああ、食へるわ、食へるわ。もつこやりませうよ」

持つて参りましたお豆を、すつかりやつてしまひますよ。

みんなは大急ぎでお家へ歸つて來ました。

\*

「お父さま、お父さま、お父さま」

「なんだい、大きな聲を出して」

「あのね、ゐたの。随分たくさんゐましたよ」

「さうか、鳩ちゃんだらう。そんなにたくさんゐたか？」

「ええ、とてもたくさん。毬子がね、お豆をやつたら、向

ふからもこつちからも、たくさんやつて來たの」

「うむ」

「そしてね、ククククククククツて食べたの」

「さうか、それはよかつたね。夕方になつたら、もう一べ

ん行つてごらん、こんごはお米を持つて」

「あら、鳩ちゃん、お米でも食へられるの？」

「そりや食へられるさ。ひよつこしたら、お豆よりもお米

の方が好きかも知れないよ」

\*

絢子さんは學校へ行きました。

お父さまはお役所へ。

昭子ちゃん、毬子ちゃんは、お母さまと御一緒に、お家

のおかたづけをいたしました。

\*

夕方、絢子さんが、學校から歸つて來ますよ、又、みん

なしてお官へ出かけました。

鳩ちゃんたちは、朝と同じやうに、みんなの側へやつて

來ました。

ミこころが、その時、絢子さんが、はツミして見るよ、た

くさんゐる鳩ちゃんのなかに、なんだか變な足ざりをした

鳩ちゃんが一羽ゐるのです。よく見るよ、その鳩ちゃんは、

足が片つぽまがつてしまつて、うまく歩くこゝが出来ない

のでした。

「毬子ちゃん、昭子さん」

「なあに？」

「ほら、見てごらんなさん」

「どうれ？」

「かわいさうね、あの鳩ちゃん、足がわるいのよ」

「あら、さうね、さうしたんでせう」

「ごれさ、何處にゐるの、さうしたのさ」

「ほら、あそこの樹の蔭に、みんな離れてゐるでせう」

「あら、うまく歩けないのね」

毬子ちゃんたちは、その足のわるい鳩ちゃんを見て、かわいさうでかわいさうでたまらなくなりました。

「さうしたんでせう」

「痛たさうね」

「あの鳩ちゃん、まだ子供のやうだけき、お父さんやお母さん、ゐるのかしら」

毬子ちゃんたちは、餘つてゐるお米を、みんなその鳩ちゃんの側へまいてやりました。ところがかわいさうに、その鳩ちゃんが食べやうとするに、他の元氣のいい鳩ちゃんがやつて来て、みんな食べてしまふのです。

絢子さんも昭子さんも毬子ちゃんも、かわいさうでかわいさうで仕方がありませんが、さうするこも出来ません。

足のわるい鳩ちゃんは、二つ三つ食べただけで、すこす

ごこ、又みんなのゐない方へ行つてしまひました。

\*

夕方のお空は紅く、夕焼が暮を張つてゐました。

「絢子お姉さま、歸りませうよ」

「ええ」

絢子さんも、昭子さんも、毬子ちゃんも、黙つて歩き出しましたが、三人も心のなかで、

「さうしてあんなになつたらう」

「わるい子供にいぢめられたのかしら。それこそ、わるい鳥にいぢめられたのかしら」

そんなごこを考へながら、お家へ歸りました。

▽……………▽

晝のやうでもあれば、夜のやうでもある、不思議なあかさが、その邊一杯にたちこめてゐました。夢です。

大きな森があつて、その真中にお宮があるのです。そのお宮の屋根の下に、丸い穴のあいた鳩ちゃんの巢が、たくさん竝んでゐました。

その一つの巢の側に、絢子さん、昭子さん、毬子ちゃんが、立つてゐるのです。

\*

お母さん鳩、お父さん鳩も、それに子鳩が一羽、寝てゐました。

やがて、子鳩が、目をさました。

そして、お母さん鳩を起しました。

お母さん鳩が、目をさました。

そして、お父さん鳩を起しました。

お父さん鳩が、目をさました。

そして、みんな、着物をきかへにかかりました。

お父さん鳩のお支度は、黒い洋服に縞のツボンでした。

お母さん鳩のお支度は、赤い洋服に格子のスカート、

それに真白いお前かけでした。

子鳩のお支度は、藍色の上衣に同じ藍色の半ツボン。

ところが、その子鳩の足に繻帯が巻いてあるのです。

「あら、どうしたのかしら、怪我でもしたのかしら」

と思つて見てゐます。鳩ちゃんたち親子が、お話を始

めました。

「おい、坊や。今日は、足の痛みはさうだい？」

「ありがたうございます。今日は、大變いいやうです」

「され、繻帯をほご てごらん」

「大丈夫ですよ、ゆふべ巻きかへたばかりですもの」

「でも、お父さんが一ヘン見てやらう」

「さうですか」

子鳩が繻帯をほごき始めます。お母さん鳩。

「坊や、だめだめだめ。お母さんがほごいてあげませう」

云ひながら、靜かに、ほごきにかかりました。

繻帯がすつかりほごけたところを見た絢子さん、昭子さ

ん、毬子ちゃん、びつくりして、からだを寄せ合ひました。

「まあ」

「まあ」

「まあ」

眞赤にはれた足首のところに、空氣銃の彈丸でもあたつたやうなきづ、口が見えるのです。

「ほんごうに困つたものだね、人間の子供たちは。大事な

坊やにこんな怪我をさせるなんて」

「さうですよ。あの時、若し弾丸が外れて胸へでもあたつたら、さうするんでせうね。たつた一人しかない坊やが、死んでしまふぢやありませんか」

「人間の子供つて、みんなあんな子供ばかりかね」

その時、子鳩が、急に顔をあげて申しました。

「さうころが、お父さん、さうぢやないんです。人間の子供たちのなかにも、ほんさうにやさしい氣持の子供がおりますよ。昨日の夕方、僕がお窓から外を見てゐるさ、ちいさな女の子が三人、お米を袋に入れてやつて來たんです。

そして、みんなにそのお米をやつてゐたので、僕もついほしくなつて下りて行つて食べやうとしたら、なにしろ僕この足でうまく歩けないでせう、他の鳩たちが先に走つて行つてみんな食べてしまふんです。僕つまらなくなつて、ぢいッさみんなの食べる様子を見てゐたら、そのうちの一番お姉さんが僕を見つけて、妹らしい子供に、僕の方へ投げやうに云つて呉れたんです」

「うむそれから？」

「それから、僕、漸くありつけたと思つて食べやうとしたら、僕が二つか三つしか食べないうちに、又、他の鳩がやつて來て、みんな食べられてしまつたんです」

「うむ」

「そして、その三人の子供たちつたら、目に涙まで浮べながら、僕の方を、かわいさうだなあ、さ云ふやうなお顔をして、見てゐて呉れたんですよ。僕、その親切のこもつた六つの目を見てゐたら、もうお米のこゝなんか忘れてしまつて、もつこもつこその子供たちと一緒にゐたいと思つたけさ、なんだかきまりがわるくなつて、歸つて來てしまつたの」

「うむ、なるほさね」

「たくさんの人間の子供たちのなかには、あの子たちのやうないい子供だつて、きつこゝるるに違ひないと思ひますよ。」

さうか、それは感心な子供だ。そんな子供なら、一ペン、お父さんも會つて見たいものだね」

お父さん鳩が、さう云つた時、子鳩が急に、絢子さん、

昭子さん、穂子ちゃんのおるることに気がつきました。

「あッ、あの子だ、あの子たちだ。お父さん、あの子たちですよ」

「どれ？」

お父さん鳩とお母さん鳩が、こつちを向いたので、鞠子さん、昭子さん、穂子ちゃんは、急にかくれやうごしました。もう間に合いません。

「もしもし、人間の子供さんたち。せまいところですが、ごうぞなかへ入つて下さい。おい、お母さん。この子供さんたちは、坊やに親切にして下さつた大切なお客さまだから、たくさん、ごちさうを差あげるんだよ」

「ええ、ええ。わかつてゐますよ。まあ、あなた方ですか、坊やに親切にして下さつたのは。ありがたうございませす」

お母さん鳩は、さう云ひながら、おごちさうをこしらへに、お臺所の方へ行かれました。

\*

お母さん鳩が、前かけで手を拭き拭き、出て來ました。

お部屋の真中にあるお机の上にのせられたおごちさうは、みんな、お豆でこしらへたものでした。御飯はお米でした。

やがて、お部屋の隅にあるラヂオがジーツミ鳴り始めます。それは、鳩の國の子供たちの放送で、あんまり人間の子供たちが歌ふので憶えてしまつたのが、人間の子供たちが歌ふ鳩ポツポの歌でした。(完)

